世田谷村日記

石山修武

八月四日

十時半研究室、佐々木睦朗氏打ち合わせ。昼食抜きで十五時半迄。サンドイッチをほおり込んで馬場さん打ち合わせ。十七時雑打ち合わせ。森の学校、打ち合わせ。面白くなってきた。若い人の力を信じてみる試みも必要だ。その演劇的空間の中でやり抜いてみよう。十九時研究室発。二〇時世田谷村に戻る。二十一時過中川幸美先生来。明日のモスクワ行の荷作を中途にして十二時頃眠る。

八月五日

六時前起床。荷作り。ロシアは初めてなのでよく解らないのだが、とり敢えずフィンランドの夏を想定して荷を作る。八時半、家内に見送られて発つ。階下に群馬の左官職森田Jrがいた。新宿西口でα社長若松氏にピックアップされて車で成田へ。アエロフロート五八四便にチェックイン。ラウンジでビールを飲み、飛行機にすべり込む。アエロフロートは記憶では乗った事がない。機内の映像は、過日磯崎さんのとこで見たドキュメンント映画と似た感じで、色の種類が極度に少なくて仲々良い。モスクワ迄七五一五kmしかし、アエロフロートの機体はボーイング七七七であるのだから何をか言わんやである。ソビエト連邦が崩壊する以前はこんな事はあり得なかった。ロシアはEUのエアーバスを購入するよりも、USAのボーイングを選択したんだな。つまりUSAに負けるのは仕方ないが、EUに対しては過去の大国としての誇りがあるというわけだ。十二時二〇分離陸。隣りの座席では若松社長が早くもグッすり眠っている。この人物はタフだ。今回のロシア行は全て若松氏のアレンジで私はただただ彼のひいたレールの上をトロッコで走るだけなのだ。それ故、何が起きるのか全く解らない。それが面白い。若松社長はロシアで色んな会社を買いまくっているらしいが、私をモスクワに引きずり込もうとしている真意は良く解らない。が、しかし、私だってそういう行動に出る事はこれ迄も多々あったから、ここは彼の用意してくれたレールに乗るのもあながち悪くはないだろう。東京ではこのところせこましい事ばかりだったので、こういう実におおまかな行動も必要なのだ、と自分に言い聞かせている。只今、日本時間二十一時前、モスクワ迄一時間弱のところを飛んでいる。モスクワの気温はC27度との事。日本時間十時ロシア時間五時頃空港着。若松氏入国審査で大分コリゴリした体験（五時間待たされた）があるとの事でVIP入国ルートを使う。しかし、少々待たされている。通訳のターニャさんともう一人の女性が迎えてくれた。もう任せるまま。女性二人共ケイタイを使う。仲々、パスポートが戻ってこない。待合い室のインテリアは何となく一九五〇年代風である。六時五〇分現在、モスクワ・シェラトン・ホテルにて熱い風呂に入り一息ついている。空港からモスクワ市内まで小一時間程の車の移動。何処の国でも見られる風景であった。郊外の量販店、車の渋滞等々。ホテルはとてものんびりと運営されている様で、時間がゆったりとしている。上階のVIPフロアーに部屋が取られていた。少し眠ろう。今、日本は二十四時、こちらはこれから一時間後にディナーを一緒しなくてはならない。十九時半頃スーツに着替えて、部屋で一人ポツ然としている。二〇時、モスクワ国

立経済アカデミー・ディレクター、セルゲー・カレンジャン氏等総勢六名と通訳入りで会食。仲々、積極的な人で、何かをすぐに出来ないかと言うのだが、私の方はロシアは何分初めての事なので、珍しく用心深い。ドイツとの人脈が深い人物のようだ。二十二時過修了。丸一日起きて動いていた。ホテルに戻り倒れるようにベッドにもぐり込む。

八月六日

朝五時目覚めてしまいメモを附し、色々と考える。若松社長は四十五才、今がまさに動き盛りだ。先日、東京で李祖原が言っていた。五十五才くらいから、ようやく世の中が良く視えてくるって。私は六〇才だが、視えてきているような増々視えなくなって壁が厚くなっているような、不安だけが大きくなっているというのが本当のところであろう。ここはモスクワの中心の通りに面しているが、六時前、車の数はまだ少ない。昨夜はスターリンが好んだと言う、グルジア産の赤ワインを飲んだが甘過ぎた。ロシアの第一印象はとスピーチを求められたので、スターリンの印象はとてもハードだが、こんなにスウィートだとは知らなかった、と述べた。ロシアは外と内とは異なる、それは建築も同じだろうとウィットに富んだ答えが返ってきた。一般的に日本人は旧ソビエト連邦にはネガティブな感じを持っていると思うが、新ロシアとは言わずとも、人間一人一人にその印象を当て嵌めてはいけない事を、当然ながら了解する。しかし、通訳の女性はサンクトペテルブルク出身だと言うがいかにもハードである。もっと具体的にやれる事を言えと言われても、着いたばかりの人間にそれは無理だろう。個々の問題に対する人間の力や性向を計りながら、計画を立てるのが私のやり方だ。と、いい返してやった。しかし、今日のモスクワ大学副学長との会には、もう少し具体的なプログラムを呈示したい。七時過、プログラム作成修了。これで押してみよう。研究室に通信文作成。下のモスクワの大通りは七時半になっても車、人間共に少なく、実に静かである。地図を見ると、ここは赤の広場のすぐ近くでモスクワのまさに中心に居るようだ。通勤ラッシュというのが無いのか、それとも、ヴァケーションに入っているのか、しかし異常だ。そう感じる、こちらがおかしいのかも。八時過七階フロアーの小さな朝食ビュッフェで朝食をとる。朝食のジャガイモとキノコの煮つけたのはとても塩からい。ヨーグルトは甘過ぎて残した。イチゴも異常に甘い。黒パンは良い味。空は日本の秋を想わせて少々物悲しい。北国のゆううつだな。しかし、部屋に一人で居るのもハードだし、どのみち一人の時間はハードなのだ。シェラトンホテルの前は今、コンストラクションサイト。隣の古い大きな建物は空屋で何も入っていない。ところどころに妙なスタイルの新しい建築が建っているのを散歩しながら見る。ホテルで手紙を出してくれと頼んだら、１$と言われ、マネーチェンジしてくれと言ったらグランドフロアーでやってくれ、グランドフロアーに行ったらあと二〇分待ってくれと言われた。成程、ロシアは待たせる国である。昨日の、今すぐ具体案を出せと言うのが、オカシイよ。コレワ。十時過ピックアップされて、モスクワ大学へ。凄まじい全体主義的建築様式だが、ここまでやればディズニーランド的で笑いを誘う。十一時前ウラジミール・ソホロフモスクワ大学副学長、アレクセイ・サルニコフ氏と会う。色々と頼まれたり、依頼したり。十二時修了。十三時ロシア料理の昼食。赤カブのスープが美味であった。十四時、了。その後、赤の広場、救世主聖堂を見て廻る。全てイカモノである。イカモノの本物として見れば面白いのだろうか。十五時半、

ホテルに戻る。メモを記して昼休み。雷が鳴って雲行きが怪しくなっている。モスクワ大学、オリンピック・スタジアム、救世主聖堂、クレムリンと一本軸が貫いていたのが印象に残る。全体主義の中には常に建築的意志が内在する。十八時二〇分若松氏にピックアップされて、何とサーカス見学に行くと言う。参ったナァと渋々ついていったら、ボリショイ・サーカスの劇場というか常設国営テント小屋であった。観光バスがズラリと並んで異様な風景。何でサーカス見学せにゃならんのだと内心ブツブツであった。三千人程収容する半円型のテント小屋の最前列の席に座る。象やラクダ、そしてワニ、ヘビの見世物が見物席の周囲をとり囲んで、人気を博している。アー、イヤダ、イヤダと思いながら、開演を待った。やがて開演。瞬時に、これは並々ならぬモノを見ているという実感に襲われる。ダテや酔狂の見世物ではない事がすぐに解った。出演者が皆真剣そのモノ。日本のお笑い芸とはレベルがちがう。二人組のピエロの芸に始まり、山羊と犬の芸、そして馬の芸、二人組の男女の空中アクロバット、圧巻は二人の男性のオリンピック級の力技体操ヘラクルス芸、チンパンジーの芸、その他と続々と繰り拡げられる芸術的見世物に圧倒されてしまい、ほとんど感動してしまう。映画や、コンピューターによる合成映像のアンリアルな見世物に自然に慣らされてしまっていた眼には、実に驚くべきリアルな身体の息使いが伝わってくる。芸の連続に圧倒された。劇場のオバさんにグイと腕をつかまれて、案内されたぬくもりも相まって、東京では全く体験する事ができぬ迫真の虚像と実体の狭間体験であった。これが演劇の中の演劇であると本当に想った。夢中で写真をとっていたら、劇場のオバさんからカメラは駄目だと叱られたが、その前の数ショットは見逃してくれる温情もあった。大満足。午後に見学した救世主聖堂の駄目さ加減も皆すっ飛んでしまう。アッという間の一時間であった。幕間の休憩時間に若松氏がもう夕食を喰べに出ましょうと言うので、今度はまだいたいのにと仕方なくボリショイ・サーカスを後にしてしまった。正直心残りであった。これは凄かった。磨き抜かれた身体芸を実感した。スポーツと芸術の合体。観客もそれをキチンと共有していた。良い空間であった。後髪を引かれる想いで、日本食レストランへ。寿司を食す。感動引かず。凄いモノがまだあるものだ。余韻さめやらず夕食をとる。十時過修了。二十三時ホテルに戻る。今日は良いモノを体験した。二十三時十五分、ベッドに入る。もしかしたら、サーカスの夢を見るかも知れない。研究室からＦＡＸが入っていたが、キチンと見る気がしない。申し訳ナシ。何か、よいモノをつかんだような気がする夜であった。